

JELA NEWS

ジェラニュース 第59号

2022年12月15日 発行

発行責任者 渡辺 薫

一般財団法人 JELA 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26 TEL.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp

難民支援事業 / 世界の子ども支援事業 / 奉仕者育成事業 / 緊急災害支援事業

私たちは、キリストの愛をもって、日本と世界の助けを必要とする人びとに仕えます

お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。(マタイによる福音書25章35～36、40節)

2022年7月31日～8月6日にかけて、JELA初となる国内ワークキャンプ「JELA English Bible & Work Camp」を、栃木県那須塩原市の農村指導者養成学校「アジア学院(ARI)」にて開催しました！ 全国から14人の中高生が集い、英語環境下での有機農業体験や持続可能な生活体験、創世記をテーマにしたバイブルスタディなどを行いました。参加者の感想文(抜粋)はP2～5をご覧ください。



国内初ワークキャンプへの思い、結実

CONTENTS	奉仕者育成	JELA English Bible & Work Camp: アジア学院で国内初のワークキャンプ実施! 参加者14人の成長の様子を一挙公開! (P2～5) / ディアコニア奨学金: 三浦太一さん「将来は世界の問題解決の担い手に」 (P5)
	世界の子ども支援	JELA古屋理事長がインド・カンボジアを初訪問 パートナー団体と連携を確認 (P6) / インドのソーラーランタン追跡調査を実施 (P7) / 首都圏初、パナソニックのリサイクル募金活動「みんなで“AKARI”アクション」に参加! (P7) / 続報「手作りマスク支援キャンペーン」現地に直接マスクを届けています! (P6) / インドLWSITオンライン・スタディツアー2023開催決定 (P8)
	難民支援	JELAのシェルター管理人を募集します (P6)
	その他の記事	リラ・プレカリア (祈りのたて琴) 「詩編との出会い」 動画公開のお知らせ (P8) / 支援者一覧 (P8) / 編集後記 (P8)



アジア学院で国内初のワークキャンプ実施 参加者14人の成長の様子を一挙公開！

思い出が僕の力になる
阿部 奎祐 (神奈川県・中1)

7日間のキャンプが終わって、行って本当に良かったと思う。キャンパーの皆との出会いやスタッフさんの皆との出会い、アジア学院の人との出会いは僕の宝物になるはずだ。一つひとつの思い出が僕の力になると思う。英語を話すこともできたし、外国人と交流ができて嬉しかったし、英語が出来なかったとしても、交流が出来ることを知った。また、留学生や校長の話聞いて、世界では僕の知らない色々なこ



とが起きていることを知った。バイブルスタディでは、神様についてキャンパーの話聞いて良かった。僕には理解できないこともあるけど、もっと勉強しようと思った。

知らない世界に踏み込んでみたい
井上 萌葉 (京都府・高3)

私の拙い英語でも意味を汲み取って話してくれるアジア学院の人たちの優しい人柄が大好きになりました。私は自分から挑



語力をつけて私の知らない世界に踏み込んでみたいと思いました。

互いに愛をもって
浦部 灯 (三重県・高1)

バイブルスタディでは、英語と日本語でのディスカッションやアクティビティを通して、神は愛のために在って、天地その他被造物は愛のために在って、人はその愛を表すためにこそ在るのだということに気付かされた。神は周りの動植物を食べなければ生きていけないように、またその大切な命である糧を、愛をもって、感謝していただくように、そして人を神の像(かた



ち)に似せて作られたのに完全にはされず、その御霊を活かして他の人の短所を補って人が互いに愛をもって生きよう作られたのだと思った。そして全ての行為行動が愛のためになっていると考えさせられた。

神様がいるのだと鳥肌がたった
大藪 房之介 (三重県・高3)

農作業では、積極的に取り組み、最後には達成感を感じられた。普段、高校で農作業をしているが、このような感覚にはならなかった。仕事という感覚があり、義務感で動いていたからなのかもしれないが、アジア学院ではみんなで楽しくという雰囲気、色々な人と時に英語で会話しながらの作業だったので、あっという間に感じられるほどに良い時間だった。また、汗をかいて働き終えた時の達成感から、「ちゃんと生きている」と実感できた。



そして、それを感じるたびに、神様がいるのだと鳥肌がたった。バイブルスタディでも、創世記から神様という存在を劇やアクティビティを通して考えたり、平和や命について意見交換したりした。どれも、これまでに一度は考えたことがあるのに、初めて気づいた事が沢山あった。分かった気になっていたのだと痛感した。

経験をいろいろな人と共有したい
カーク 麻矢 (三重県・高2)

アジア学院には、色々なバックグラウンドをもった人が来ていました。色々な人が集い、一緒に暮らし、農作業をしていて、初めて見た光景でした。皆さんとても優しく、コミュニケーションをとってくれました。一人ひとりが自分の考えを持っていて、沢山の話をしてくれました。

バイブルスタディでは、神様が世界を作られたところを中心に学びまし

た。学校でもこれまでたくさん聖書を学んできましたが、ここでのバイブルスタディが一番、聖書について深く考えられました。いろいろな人と意見を共有して、とても良い時間でした。



一週間というとても短い間だけれど、とても楽しく、たくさん学びました。学校に帰ったら、この経験をいろいろな人と共有したいと思います。

学生としてアジア学院に戻りたい
菊地 恵那 (神奈川県・中2)

私はこのキャンプで、生命の大切さについて特に学びました。普段は何も考えずに食べていた野菜が、食べることができるようになるまでに沢山の作業をしている事を知りました。炎天下で草取りや雨が降っている中での収穫を通して、農作業の大変さを知り、野菜の大切さを覚えました。



キャンプでの一番の思い出は、最後の夜のキャンプファイヤーです。留学生と一緒にゲームをしたり、ダンスをしたりしました。キャンプファイヤー中に、私はEnglish Speech (英語のスピーチ)で、キャンプで学んだことや私の夢について話しました。私の夢は農家になることです。前は農家になりたいと思っていても人に言うことができませんでした。キャンプで色々な農作業をみんなでしているうちに改めて農家の仕事をやりたいと強く思うようになりました。今度は学生としてアジア学院に戻りたいです。

※フードライフワーク=アジア学院で用いられている「食べものといのちとは切り離すことができず、互いにとって必要不可欠である」という意味をもつ言葉。これを実践する農作業等のことも指す。

お互いを笑顔に
菊地 匠人 (神奈川県・高1)

このキャンプで、私は誰もが協調して平和な世界を作るためにどんな事が必要か、自分なりの答えを見つけることが一つの目標でした。一週間を通して、見つけ出した答えはお互いを笑顔にするということです。笑っているとき、悲しい気持ちや嫌な気持ちの人はいないはずだからです。

今回のキャンプでは、沢山の事を学びました。それらすべてを胸に刻み、これからの人生の糧としたいです。

海外にいるような不思議な体験
河内山 粋末 (神奈川県・高2)

フードライフワーク*ではブルーベリーの収穫、じゃがいもの大きさ選抜、雑草抜き、大豆の土かぶせなどをしました。どれも自分が思ったよりハードな仕事で、作ってくださっている方に感謝の気持ちを忘れないで買おうと思うようになりました。



バイブルスタディは哲学のような質問が多く、考えるのが難しかったですが、チームに分かれてディスカッションし、他のキャンパーたちの考え方に触れて自分が思い付かないような意見がたくさん聞けたのが良い経験になったと思います。

見た目、性別、年齢、言語や文化が違っても仲良くなれるし、日本にいない海外にいるような不思議で貴重な体験ができて楽しかったです！本当に参加してよかったです！

優しさは言語の壁を超える
河内山 澄人 (神奈川県・中2)

リーダー達やキャンパーそして留学生たちの優しい心が一番心に残りました。本当に皆優しくかったです。その優しさは言語の壁さえも超えてきました。例えば、昼食時に飲みたかったヤギのミルクが空っぽになっていた時、まだ一回も話したことがない留学生が自分のミルクを分けてくれました。この他にも、数えきれないほどのありがとうございましたと数えきれないほどの支えがありました。見返りを求めてなくてこれほどの優しさが出るのかと思いました。



学んだ3つのこと
杉野 夏美 (山梨県・高3)



この7日間で学んだことは3つあります。1つは、「命のサイクル」です。普段口にする豚肉や牛肉は、何頭もの豚や牛が屠殺されて、私たちが食事として食べていることを知りました。つまり、命を頂いて、私たちは生かされているということです。

2つ目は、「仲間の大切さ」です。キャンプでは、常にキャンパーやスタッフ、アジア学院の人達と一緒に生活していたので、寂しさを感じることなく、楽しい時間を過ごすことができました。

3つ目は、神様と私の関係です。キャンプの中で、常に神様に見守られているなと感じました。

助け合える人になりたい
高野 遥 (熊本県・中3)

アジア学院で人とのコミュニケーション、農業、キリスト教や命のこと、沢山のことを学びました。色んな国の人達がアジア学院で生活していて、言語が違ったり、文化が違ったり、一緒に勉強をして、農作業をして、たまに喧嘩をして日々を過ごしている事が凄いなことだと思います。私もアジア学院の留学生たちの様に言葉が分からなくても協力し合い、助け合える様な人になりたいと思いました。



自分の英語を磨いて
濱村 一樹 (三重県・高2)

キャンプ内では多くの友人ができました。その中でもアジア学院の学生とは英語で会話しました。彼らに自分の学校のことや趣味などについて話しましたが、思っていたよりも彼らの英語を聞くのが難しかったり、自分の言いたいことを英語で話さずらかったりしたので、これからはより多くの外国人と話して、自分の英語を磨いて行こうと思いました。



このキャンプで食べ物への感謝と、人と話すこと、作業することの大切さを改めて学べたので、本当にコロナ渦の中のキャンプに行けてよかったです。このキャンプに行けるように準備をしてくれた全ての人々に感謝の気持ちを伝えようと思いました。

たくさんの「初めて」
早野 翔 (熊本県・中1)

ワークキャンプでは、たくさんの「初めて」と触れ、たくさんの国や農業の事を知ることが出来ました。キャンプの前までは「農業は少して、後は外国人と一緒に遊んだりご飯食べたり、たくさん交流するんだろなあ」と思っていました。実際は自給自足の為の農業のお手伝いに、ヘトヘトになりながら取り組みました。20cm位のナメクジとの遭遇や野菜を育てるためにその周りの環境を整えることなど、楽しい発見がたくさんありました。



英語でのコミュニケーションは、とても不安でしたが、時間を重ねるにつれて、ジェスチャーや知っている単語から連想したり、スタッフに助けってもらったりしながら、留学生ともコミュニケーション取ることが出来ました。

当たり前のことに対する感謝
船山 李緒 (東京都・高2)

普段私は食材が誰によってどのようにして育てられたのか考えることがありませんでした。しかし、今回のキャンプでの農作業を通して作物が作られる過程を少し知ったことで、食べ物を作った人の労力の分も感謝しなくてはいけないなと思いました。

また、今までは処理されたお肉しか見てきませんでしたが、アジア学院で豚や鶏を見てそれらが犠牲になって自分達の食材になっていることを目の当たりにし、命をいただいているという当たり前の事に対する感謝の気持ちが、自分の中でとても大きくなりました。



さらに、相手を理解しようとする姿

勢の大切さも学びました。例えば、相手のバックグラウンドを考慮して発言したり、相手の言いたいことをある程度予想してみたり、相手の人間性を会話で考えてみることで、これは友達になった留学生と積極的に話し、理解しようとしている姿から学びました。たとえ国や文化が違うことで言語が違っても、相手に興味をもち、理解しようとする姿勢さえあれば、言葉の壁を越えて仲良くなれるということを知りました。

ここに掲載した参加者のレポートは、ほんの一部の抜粋です。ぜひJELAニュースブログにて完全版をご覧ください！

こちらのQRコードからもアクセスできます▼



将来は世界の問題解決の担い手に JELAディアコニア奨学金 奨学生 三浦 太一さん

奉仕者を志す方々のための「JELAディアコニア奨学金」では、2021年度よりフィリピンのバックグラウンドを持つ三浦太一さんを支援しています。現在東京国際大学（埼玉県川越市）2年次に在学中の三浦さんに、ご自身の生い立ち、来日の経緯、JELAの奨学金との出会い、大学での学びについてご寄稿いただきました。

私は1997年3月10日に北海道千歳市に生まれました。私の父は日本人でトラックの運転手、母はフィリピン人です。私の母は、自分の家族を経済的に支援するために来日しました。その理由も含め、文化の違いや言語の違いで毎日のようにけんかしていたため、母が私と私の兄弟をフィリピンに連れていくことにしたのです。母によると子供の世話と仕事の両立が難しいとのことでした。

フィリピンは日本に比べると貧しい国でその上に治安が悪いのです。そのため、私はフィリピンにそのまま住むと私と家族の将来が暗くなると感じたので、母は反対していましたが、自分の意志で将来のために日本で教育や仕事に挑戦したいと思い、18歳の時に来日しました。来日したばかりの時、日本語、文化、初めての仕事などは自分

が思っていたよりとても難しく感じました。そんな中で、カトリック教会で出会った方々のおかげで日本の高校に入学することができ、アルバイトをしながら高校に通いました。

高校とアルバイトの両立の難しさに加え、当時私の考え方に変化がありました。お金を稼げば、生活はきっとできると思ってしまう、私と私の家族の将来のためという私が来日した本当の理由を忘れてしまって、高校の出席や成績に悪影響を与えてしまいました。ですが、高校の先生方、特に私の担任の先生や周りの方々の応援のおかげで高校を卒業することができました。高校卒業前に、私の成績は自分でも良くないと思っていたので大学を諦めていましたが、担任の先生に諦めないで絶対大学に行ってほしいと言われて、いろいろな大学を調べて二つの大学を受験しましたが両方不合格で、経済的に難しかったので本当に諦めるしかないと考えていました。

東京国際大学を受験しやっと受かりましたが、入学金や学費のお金がなかったため進学は難しい。いろいろなローンや大学に電話して後払いのお願いをしても断られるなか、カトリック教会が助けてくれました。その後、カトリック教会の方にJELAの奨学金を教えてください、応募し、現在奨学金をいただいております。



アルバイトに励む三浦さん

本当に感謝していますが、どうしてこんな悪い生徒を助けたのだろうと自分で思ったりしてしまいます。皆様の応援が無駄にならないために、現在国際関係学部で勉強しています。国際関係学部で世界の国々がどんな交流をしているかを勉強しています。そのほかに国際法、異文化、国際的な問題などを主に勉強しています。

私は個人的にフィリピンのドゥテルテ前大統領の麻薬戦争に研究関心を持っていて、それをテーマに研究し、その戦争における人権問題などを理解して、反対する必要があると思っています。そのほかに現在ミャンマーのロヒンギャ問題や中国のウイグル問題などの勉強もし、世界にはいろいろな問題があるとわかりました。

JELAの奨学金のおかげでこれらを勉強する機会ができ、誠に感謝しております。フィリピンで育ち貧しい生活を送る人々と暮らした経験を生かし、将来は、世界の全ての問題を自分で解決することはできないかもしれませんが、解決する方法の一部になりたいと思います、もっと勉強を頑張りたいと思っています。

JELA古屋理事長、インド・カンボジアを初訪問 パートナー団体と連携を確認



8月後半から9月上旬にかけて、JELAの古屋四朗理事長、ローウェル・グリテベック理事がインドとカンボジアを訪問し、JELAの世界の子ども支援事業で連携する現地パートナー団体の代表らと会合を持ちました。

古屋理事長は2020年3月30日にその職に就任しましたが、時を同じくして起きた新型コロナウイルスの世界的な感染拡大により、これまで海外パートナー訪問を実現できませんでした。今年6月に海外への渡航が徐々に可能になったことを受けて、この度のインドとカンボジア訪問が実現しました。

初めに、JELAが20年以上に渡って医療機器提供やボランティア派遣などで協力してきたインドのパートナー団体CRHP (Comprehensive Rural Health Project) を訪問し、ショーバ・アロレ代表、ラヴィ・アロレ共同代表らの働きを視察しました。CRHPは地域の保健・開発における世界的成功例と言われており、コロナの流行に際しては、1万6千人の患者を大半は無料で引き受けるほどの底力を発揮しました。今回の視察にあわせて、日本の支援者から寄付していただいた手作りマスクを施設内のプレスクールの子どもたちに配布することができました。

続いて訪問したコルカタでは、2009年から関わりのあるLWSIT (Lutheran World Service India Trust) でクマー・ナグ事務局長らと会合を持ち、JELAが支援する児童支援施設などを訪問して同じく手作りマスクを届け、少女たちとも交流することができました。

インドにおける最後の訪問地であったチェンナイでは、LPGM (Lutheran Partners in Global Ministry) が運営する男子校・女子校の学校を視察しました。



チェンナイにて

その後、カンボジアに移動し、現地パートナー団体であるLWD (LIFE WITH DIGNITY) と共に、JELAが昨年と今年建てたプレスクール2棟を視察しました。今年4月にパナソニック様からご寄付いただいたソーラーランタン1050台を配布した村では、ソーラーランタンを実際に使っている家族にインタビューし、ソーラーランタンが現地の人々の生活に与えている利点について調査を行いました。

また、首都プノンペンから車で7時間近く離れたポーサット州レアン・クパーウ村では、2019年にJELAのサポートによってLWDがODA (政府開発援助) 草の根・人間の安全保障無償資金協力で申請し、2020年に完了した給水

システム整備計画 (水プロジェクト) の現場を視察しました。すでに給水システムが現地の人々にとってなくてはならない生活の一部になっていることを、確認することができました。



給水施設を視察する
古屋理事長

(古屋理事長より) JELAは、助けを必要とする人々に仕えることを使命とする団体です。特に海外では子ども達に焦点を合わせています。今回の出張で、それぞれの地の子どもたちの姿と、JELAの現地パートナーの働きをじかに見ることで大切さを実感しました。ぜひ、JELAに関心を持つ多くの方々に、実際に見ていただきたいと願っています。

難民支援

難民シェルターの管理人を募集します

JELAが都内に保有する難民用女性シェルターハウスの住込み管理人を募集しています。ご興味のある方は、JELA (jela@jela.or.jp) まで件名に「管理人希望」と明記の上、ご連絡ください。詳細はご連絡をいただいた方にお伝えいたします。

■ 募集要項

- 募集人数:** 女性1名 (又は夫婦1組)
- 所在地:** 東京都内 (北部)
- 業務内容:** 難民用シェルターの住込み管理人として、物件の美化に努め、居住者へのゴミの出し方、ガスの使い方、家電製品の使用方法や清掃の教示など、また新規入居者への設備使用の説明、緊急の対応。月に一度のJELA (東京都渋谷区) への報告有り。
- 報酬:** 有り。謝金、居住用の部屋 (バス・トイレ・キッチン) は共用) の無償提供・水道光熱費の免除。
- 資格:** 成人の方で、難民支援や外国人に抵抗のない方。健康に自信があり、英語での簡単なコミュニケーションが取れる方が望ましい。

インドのソーラーランタン、追跡調査を実施

2014年から2017年にかけて、JELAはパナソニック ホールディングス株式会社よりインドの無電化地域のために延べ1400台のソーラーランタンをご寄付いただきました。

最後の配布から5年が経過した今年8月、パナソニック様のご支援を受け、JELAはインドの3州 (西ベンガル州、マハラシュトラ州、タミル・ナドゥ州) を訪問し、現地で寄付後のソーラーランタンの追跡調査を実施いたしました。

ソーラーランタンの寿命は約5年とされているので、現地を訪問しても作動するものが残っているのか調査前には不安もありましたが、各寄付先では今なお現役で使えるソーラーランタンがいくつもありました。

現地の人々からは、「日本メーカーのものは耐久性がある。すでに7年も経過して外観は汚れているがまだ使える」「正直、信じられない。他国の安

価なものは1年間使用できればいい方で、たいてい数ヶ月で壊れる」「パナソニック製はソーラーランタンのイメージを変えた」などの声が聞かれました。



JELAはこの追跡調査を受けて、インドの無電化地域でソーラーランタンがどのように使われ、人々の生活に何をもたらしたかについて報告書にまとめ、パナソニック様と共有し、今後のインドの子ども支援にも役立てていきます。

「みんなで“AKARI”アクション」 首都圏初の試みにJELAが参加!

10月、JELA ミッション・センター1階のエントランスに、ソーラーランタンのご寄付でおなじみのパナソニック様のリサイクル募金活動「みんなで“AKARI”アクション」のリサイクルBOXを設置しました。パナソニック様の担当者によると、首都圏でリサイクルBOXが設置されるのは初めてとのことでした。

リサイクルBOXでは、本 (ISBNコードのついたもの) ・DVD・Blu-ray・CDを回収します。回収した本やDVDなどに値段をつけてリサイクル業者に引き取ってもらい、その代金をソーラーランタンに換えて、発展途上国の無電化地域にお届けする仕組みです。

今回は、リサイクル募金活動「みんなで“AKARI”アクション」のリサイクルBOXを通じて、JELAを支えてくださる皆さんの本やDVDなどのご寄付がソーラーランタンとなり、

カンボジアの子ども支援に役立てられます。

JELAにご来社の際には、ぜひ読み終わった本、見終わったDVD・Blu-rayなどをリサイクルBOXにご寄付ください。ご協力をよろしくお願いたします。



続報「手作りマスク」 今も現地に届けています!



JELAが、昨年12月15日まで実施した「インド・カンボジアの子ども達に手作りマスクを届けよう!」というキャンペーンに、全国の皆さまがのべ数千枚のマスク寄付で応えてくださいました。手作りマスクの寄付に賛同し、ご協力くださいました皆さま、本当にありがとうございました。

皆さまからご寄付いただいた手作りマスクは、インド、カンボジア、ガーナの子どもの元に適宜届けられています。

今年の8月、9月、11月にもJELAスタッフが手作りマスクをインド、カンボジアに届けてきました。子どもたちは色とりどりの手作りマスクを手にしてとても喜んでいました。発展途上国では、いまだに公衆衛生への意識が低いこともあり、感染症に対してマスクを着用したり、手洗いをしたりする習慣が根付いていません。

手作りマスクをお渡しすることは小さな働きですが、子供たちに公衆衛生の大切さを伝える意味のある活動です。新型コロナウイルスが一日も早く収束することを祈りつつ、JELAはこれからも支援国における公衆衛生の啓発活動に取り組んで参ります。





**好評につき2023年も実施決定！
インドのパートナーについて知ろう
オンラインのスタディツアーを開催します**

JELAはインドの公益団体LWSIT (Lutheran World Service India Trust) と協力して、コルカタ市内のスラム街に住む少女(6~14歳)たちに食料や教育を提供する支援を2009年から行なっています。西ベンガル州の州都であるコルカタはインド有数の都市ですが、同市にはスラム街が多数存在しています。LWSITは、孤児、ストリートチルドレン、スラム街の子どもたちを対象に「チャイルド・ケア施設(Child Care Institution=CCI)」を運営し、子どもたちが学校に通い貧困から抜け出すための支援をしています。

JELAでは2022年に、LWSITと共同で「インド・コルカタ・オンライン・スタディツアー」を実施し、好評だったことから2023年も再びオンライン・スタディツアーを開催することを決定しました。

2023年オンライン・スタディツアーの開催は、3月中旬を予定しています。インターネット環境があれば、参加費無料でご参加いただけます。開催概要が決まりましたらご案内いたしますので、参加をご希望の方は、JELAウェブサイトまたは右のQRコードよりお申し込みください。



またオンライン・スタディツアーの情報は随時、JELAホームページやニュースブログでもご案内いたします。JELAの海外パートナーを知り、国際協力や教育支援について理解を深める良い機会となりますので、ぜひご参加ください。

支援者一覧

(2022年6月1日~9月30日)

(順不同・敬称略)

青木孝士/穂田宗隆・信子/秋吉英理子/阿部光成/安藤淑子/石澤とし子/井上秀樹/江崎啓子/大塚真佐子/大嶺愛持・裸覇武・十六夜/小川副代/柿沢純江/片岡光夫/勝部久子/京谷信代/清田純次/倉知延章/小長谷ヨコ/小松由美/佐野孝之/ジェームス・サック/篠崎智恵子/霜尾閑子/深川ひろみ/杉本洋一/杉山美紀子/田中淑子/谷口美樹/辻裕子/綱春子/寺澤陽子/東郷優子/鳥飼勝隆/中山玲子/西垣親子/西立野園子/ニフェルすみ子/野口久志/野田千恵子/芳賀美江/原ふじ子/原島博/原田靖彦・裕子/平林洋子/廣幸朝子/藤本敬子/瀧田康穂/古屋四朗/保坂和子/松岡俊一郎/南谷なほみ/三宅洗子/宮澤真理子/村上貞子/初山昭恵/森下真樹/山本了/吉見憲明/九州ルーテル学院/クリスチャン・リエウォ・ミストリーズ/㈱三牧建設工業/日本ルーテル神学校/JELC市ヶ谷教会/JELC玉名教会

ご支援ありがとうございます。
匿名をご希望の場合は、ご送金の際にお知らせ下さい。



**お待たせしました！
キャロル・サック宣教師による「詩編との出会い」
動画版をついに公開！**

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)拡大のさなか、JELAはこの時代にこそ祈りや心の癒やしが必要とされていると感じ、リラ・プレカリア(祈りのたて琴) 研修講座のディレクターを務めたキャロル・サック宣教師とともに「詩編との出会い(全3部)」というプログラムの動画を作成し公開することにいたしました。

本動画は、キャロル師がこれまで日本各地で行ってきた1日リトリートを映像版にアレンジし、リラ・プレカリアについての基本的な講義や、患者との交流の逸話、キャロル師がハープと歌を交えて視聴者をリードする祈りの時間などが収録されています。撮影動画の編集作業や日本語字幕の作成は想像以上に時間を要しましたが、この度ついにJELAの公式YouTubeチャンネルにて全編を公開いたします。



お使いのスマートフォン等で右のQRコードを読み取っていただくか、「JELA YouTube」とインターネットで検索してご覧ください。どなたでも無料でご視聴いただけます。今後もJELAは心に残る映像を配信してまいりますので、チャンネル登録もぜひよろしくお願いいたします。

▼ご視聴はこちらから



編集後記

2001年にJELAのワークキャンプが米国で始まった頃、JELAの夢は、参加者が奉仕活動を通して神様と出会い、信仰的に成長できる機会をいつか国内でも提供することでした。今年、足かけ20年のその夢がアジア学院で叶いました。しかし、達成感ばかりではありません。青少年をキリストの愛に根ざす奉仕者へと育成する現場は、他の教育の現場と同様、実は霊的な戦いの最前線であるからです。今後ますます、世界は教会や聖書の教えが世の基準に合致することを望むようになってしょう。奉仕者育成の場を委ねられている者は、ブレない姿勢を神に求められていると思います。聖書的奉仕の土台は、奉仕は何らかの不利益があるどころか、捧げれば捧げるほどに豊かに必要が備えられるという神への全的信頼です。一年で一番暗さが増すこの季節にクリスマスが人に希望を与えるように、世がいかに懐柔を試みようとする、光である神に目を向ける希望を発信し続ける団体でありたいと思います。(渡辺薫)

**JELAを
継続的に支える
JELAサポーター
を求めています！**

年1,000円から！クレジットカードによる
自動定期寄付プログラムです。



詳しくは で検索



JELAは持続可能な開発目標 (SDGs) を支援しています。

SDGsは、2015年に国連サミットで採択された、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標です。

2030年に向けて
世界が合意した
「持続可能な開発目標」です



〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26
Tel: 03-3447-1521 Fax: 03-3447-1523
https://www.jela.or.jp/ jela@jela.or.jp

寄付金のご送金先：
ゆうちょ銀行 口座番号: 00140-0-669206 (加入者名: 一般財団法人JELA)
三井住友銀行 飯田橋支店 普通2896506 (口座名義: イッパソウザンホウジエ)